

問 う



ブナの大木。我々が行く前からそこにあり、帰った後もそこにある。どの木もそうして立っている。

沢を遡行して頂上を目指す。沢登りである。滝ではシャワーを浴びて登り、つぼではときどき落ちたりもする。谷にいったばいの水はやがて登るに従って徐々に少なくなり、われわれは最後に水のないところに到達する。その水あり／なしの境界線ともいえるところを通過し、後は藪をこいで頂上に至る。

下りに同じルートをとると、上部では槌状の単なる地面のへこみとしか言いようのないところが下るにつれて湿ってきて、おや水がしみ出ていると思う間もなくそれは流れを形成し、われわれは水音を聞き、そして水の中を歩いているのに気がつく。いつもそのたびに、なぜこれほどの量の水が出てくるのかとも不思議な気がする。

水がいつの間にかしみ出て来てくるのも不思議だけれど、山の中で大きな木に会うとおまえはなぜここにずっと立っているのだと訊きたくなることもある。晴れわたった秋の空を見上げていると、どうして空の色や雲はこれほど美しいのかとも思う。

なぜ美しいのか、なぜ木がそこに立っているのか。

自然に対峙するとき出てくるこれらの「なぜ」は、答えのない「なぜ」である。変な言い方になるけれど、それは訊いた時点で終わっているような問いだといってもいい。

答えを期待しているのではなく、「なぜ」と言ってみたくなり、つぶやくことで何か通じるのでないかと思ひ、それでまた、そこにある自然に戻ることになる。

しかし、繰り返し繰り返し訊ねたい「なぜ」がもう一方にある。

答えのほしい「なぜ」がある。

あの人はなぜ死んだのと、特に、それが不慮の死である場合、誰からももらえない答えをずっと探し続けなければならぬ。なぜ死んだのだろうと繰り返し考える。

死ぬということはどういうことなのだろうといつも不思議に思う。

このような問いは、普通に生きて普通に死ぬ場合、誰もが持っている問いではないようである。

死ぬのは生まれてきたからで、生まれてこなければ死なないのでから、そんなことは問題にしたこともないという回答がある。

また、死んでしまえば何もないのでから、分からないことを考えることはないという回答もある。

それにもかかわらず、私の疑問は消えない。

死んだあの人はどこに行ったのだろう。

死んだ人のことは各自の記憶に残っているという。その通りだが、各自の記憶だけなら、それらが共通のものかどうか確かめようがない。

各自の記憶を底で支えている記憶のもとを想定すれば、それが死んだその人でないのか。

仏陀は、「靈魂と肉体は同一か、別か」というような形而上学的な問いには黙して答えなかった。その理由も巧みな比喩で説明している。日常の生活を第一にせよと。

そのことは知っているがずっと理解できない。直接尋ねたいがそれは出来ない。あの人はどこに行ったのだろうかという問いは消えない。

(二〇〇六年一〇月十一日)